

「なめ猫」と、 情報セキュリティの今昔

マイクロソフト株式会社 チーフセキュリティアドバイザー
JNSA 副会長 高橋 正和



情報セキュリティの日に合わせて実施している“みんなで「情報セキュリティ」強化宣言！2008”という活動で、「なめ猫」を使わせてもらっている。「なめ猫」は、自分にとっては懐かしい題材なのだが、近年リバイバルしているそうで、子供を中心に人気があるらしい。面白い事に、「なめ猫」が流行した1980年から1982年というのは、現在のITにとって大変興味深い時代である。

例えば、1981年にはIBM PC/MS DOS、Apollo DOMAINが発売され、4.1BSDが発表されている。スペースシャトルが初めて飛行に成功したのもこの年である。

翌1982年には、Sun-1、Compaq Computer、Lotus 123といったところが活動を開始し、最初のコンピュータウイルスといわれているElk Clonerが確認された年でもある。Elk ClonerはApple IIに感染するウイルスで、IBM PCに感染する最初のウイルスは、1986年のBrainウイルスであることから、「なめ猫」が流行していた当時はウイルスに感染する心配をしなくてもよかった時代といえることができる。

なお、1982年には、汎用コンピュータに関するスパイ事件が起きた年でもある。そして、1983年には、ARPA NetのIP化が行われた年にあたる。この時期は、汎用機から、ITへと時代が変わっていった時期かもしれない。

ところで、JNSAが設立されたのは2000年だが、日本におけるネットワークセキュリティは、この時期から本格化している。前年の1999年にはMelissaがインターネットを通じて感染を広げ、2000年には、多数の官公庁のホームページが改ざんされ、2001年にはCodeRed、Nimdaといったワームが問題となった。

今でも印象深いのが、官公庁のホームページが改ざんされた理由として、ファイアウォールが導入されていないためと報道されていた点である。少なくとも、2000年の日本においては、ファイアウォールは必須とは考えられていなかった。

さて、「なめ猫」がリバイバルしている昨今を見ても、1980年とはもちろんのこと、2000年当時ともずいぶんと変わってきている。攻撃の手法が変わってきたことはもちろんだが、情報セキュリティという概念自体が拡大している。

たとえば、学校の裏サイトやプロフといった、技術的というよりは、セーフティやモラルといった安心・安全に関する領域の問題が、情報セキュリティの問題として扱われるようになったことである。また、弊社が独自に行った調査では、企業のIT担当者の61%が「従業員のモラルやセキュリティに対する認識が低い」ことに不満を持っているようだ。

これらの事例を見ていると、情報セキュリティの事で悩んでいるのは、専門家だけなのではないかという疑問と、専門家と世の中が求めている情報セキュリティが乖離しているのではないかという疑問が浮かんでくる。

今、このような疑問が出てくるのは当然のことなのかもしれない。2000年を日本における情報セキュリティ施策のPDCAサイクルの始まりだとすると、ここ1、2年は一通りの導入が終わり、CheckとActionのフェーズへと入っているように思われる。様々なレベルで、これまでの施策を評価し、今後の方向性を見つけていく時期だと考え、アプローチの一つとして、“みんなで「情報セキュリティ」強化宣言！2008”という緩やかな活動を行っている。

JNSAでは、情報セキュリティに関する活動が幅広く行われている。これらの活動から、現在から将来に向けた、新しい情報セキュリティに関する活動が行われ、情報セキュリティ施策を牽引していくものと期待している。